

---

# 願い桜

紺野智夏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

願い桜

### 【Nコード】

N8498L

### 【作者名】

紺野智夏

### 【あらすじ】

4人の少年少女の恋の行方、のお話。

桜並木の下を2人で歩いた記憶がまぶたに焼き付いていた。

桜の花びらを踏みつけないようにゆっくり歩くミズキは、優しい人なんだなと思った記憶がある。

それを本人に告げると、心底可笑しそうに「うっかり毛虫とか踏みそうで、嫌なだけ」って言われてしまった。その素直さが可愛くて、初めて惹かれた春の朝だった。

「ユウ、おはよ」

千鶴に肩を叩かれて、我に帰る。どのくらい此処に立ち尽くして居たんだろうか。

「ちい、早いね」

「あと10分で始業だよ？」

「嘘、マジか」

「何かぼーっとしてた？」

「春だからなあ」

春だから、封じ込めてきたはずの記憶が、少しだけ蘇ってしまったみたいだった。

千鶴と小走りで教室へ向かう。幸いまだ先生はきておらず、教室は騒がしい声で溢れかえっていた。

「ちいちゃん、ユウ、こっちこっち」

後ろの方の席で、よく見知ったヤツが手招きしているのが見えた。

右手をあげ、教室の段差を越え、タツキの隣に座る。

「おはよ、ってか、ミズキ来てたんだね」

「きてちゃ悪い？」

「いや、珍しいじゃん」

千鶴が驚くのも無理はない。ミズキは授業をサボる常習犯だから、一限から教室にいるなんて快挙に近い。

始業時間から10分がたっても、先生は教室にあらわれなかった。春眠は老若男女平等にばらまかれるものなのかもしれない。

「はあ」

頬杖についてミズキが溜め息を吐き出した。機嫌が悪いのかもしれない。なまじ綺麗な顔立ちをしているせいで、ミズキのしかめっ面は変な迫力がある。そして同じくらい憂うミズキは綺麗だった。

「はあ……」

隣からも溜め息が聞こえる。

「ちいまで溜め息ついて、どーしたの？」

問いかけると、千鶴は困ったように笑って首を振った。

「なんでもないよ」

なんでもなくはないはずだ。溜め息は移る。気付けばタツキと同時

に、大きな溜め息をついていた。

溜め息でもつかなきややってらんねー、タツキがいつだか顔を歪めてそう呟いていたのを思い出した。

「先生来ないなあ」

「ねねっ、花見しない？」

「でも授業じゃん」

「休講だって、どーせ」

それもそうだな、なんて4人で教室を抜け出した。中庭には大きな桜の木があつて、そのしたにはベンチと机が並んでいる。

千鶴がベンチに駆け寄り、手招きした。

「すごい綺麗！」

タツキが千鶴に駆け寄り、ホントだ！と肩を並べた。

ミズキは躊躇いがちに桜の木の下へ歩み寄る。強がっているんだろ  
う。

「こっちから見ても綺麗だけどな…」

思わず呟いた。だけどミズキは気付かなかったのか、そろそろとタツキの隣へ歩いていった。

かなわないなあ、かなわない。とてもかなわない。ミズキの視線は  
まっすぐ、タツキだけをうつしている。

苦しい気持ちが胸から込み上げた。逃げ出したい衝動にかられた。  
それを拒むように突風が吹く。

「うわっ、すごい！ユウもおいでよ！」

まるで雪のようだった。逃がさないためのさくらの豪雪。みんな逃げ出したい筈だ。辛いはずだ。だからひとりで逃げるわけには行かないのだ。3人のほうへ足を向けた。

「さくらの花びらを地面につくまでに捕まえると、願いが叶う」

唐突にミズキが言った。なにそれ、と千鶴がミズキに疑問を投げかける。

「迷信、うちのじーさんが昔言ってた」

タツキが黙って手を伸ばした。宙を掴む。空振りに悔しそうに舌打ちをして、再び風を待つ。

千鶴も腕をまくり、花びらを目で追っている。

みんな何を願うのだろうか。誰かの願いが叶えば、壊れてしまうこの関係に、何を望むのだろうか。

不意に花びらがゆっくり落ちてきた。思わず手を伸ばす。

「あ」

その手はミズキの手と重なり、2人で手を引っ込めた。花びらはゆっくり地面に落ちていく。

「ミズキはなんてお願いするの？」

問いかけに曖昧に微笑んだまま、首を振った。どうやら内緒らしい。

「毛虫が居ませんように、とか？」

「そんなわけではないだろ」

「嫌いなクセに」

「みんな嫌いだろ」

「みんな好きだよ」

「は？」

みんな好きだよ、みんなのことが。

私は飛び上がって花びらを一枚掴み取り、願をかけた。

願わくはこのバランスが崩れませんように、と。

みんな一枚ずつ、願いをかけた花びらを、そっと根元にかえした。  
同じ願いであればいい。

タツキが髪をかきあげながら、戻ろっかと呟いた。

桜の木の下を離れた3人の背中をみながら、叶わぬ私たちの気持ちの行方が、どうか平和でありますようにと、桜の木に念をおして私も歩き出した。

（後書き）

登場人物についてひとつ。

櫻井優花↓ユウ 女の子 ミズキが好き  
水樹桂太↓ミズキ 男の子 タツキが好き  
立木菜々↓タツキ 女の子 千鶴が好き  
芦谷千鶴↓千鶴 男の子 ユウが好き

そんなささやかな四角関係のお話。

プチ性別トリックになっているのですが、深い意味はなかったり。

実際に失恋したときに、心の中の物を吐き出すように、携帯に打ち付けたお話でした。四角関係、それもそのまま。

現実のバランスはそううまくはいかないけれど、せめて物語の中だけでも、4人がハッピーエンドな着地点を見付けてくれることを願っています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8498/>

---

願い桜

2010年10月22日08時09分発行